

巻頭言

混乱した教育

佐久間 貞行

最近の世情に鑑みて、再び教育の抱える問題点に思いを致す機会が多くなった。最近の学校教育を批判する言葉のなかに多いのが、教育が記憶を主体にしており思考する習慣をつけていないと言うのがある。多分に若い世代の仕事に対する適応の状況をみたり、大学受験の周辺の事情を考えてのことと思われる。確かに若者の多くは待ちの姿勢で、進取の気性、創意工夫の気構えに乏しい。また大学の入学試験の在り方にも、記憶を主体としたものが多いことも事実である。しかし思考力、創造力を伸ばすことと、多くのことを記憶することのあいだに矛盾はない。むしろ記憶力の良いことは誉められこそすれ貶されることはない筈である。では何が問題なのかということになれば、おそらく現在の学校教育が余りにも画一的なカリキュラムと評価がなされていることではなかろうか。その一つは頭脳の発達を無視した時間的にも方法論としても個性を見ないで、児童生徒全体をマスとして扱う教育である。他方はその評価の一つとなる入試や卒業認定でも、人間形成を殆ど考慮に入れない画一的なプロセスや内容を強要していることであろう。発達心理学あるいは臨床心理学では精神発達史の見解はかなり明瞭になってきている。それは幼児期の環境への関心と記憶力増進の可能性、少年期の精神内面への関心と思考力増進の可能性等々である。しかし現実には家庭教育においても、家族としてのまとまりを保てなくなり、親子の関わりも安定性を欠いた教育が行われるようになってきた。また学校教育への不信や学歴偏重のあまり、補習や塾に通う児童生徒が多い。すなわちよく指摘されているように、家庭教育においても学校教育においても精神発達や人間形成とはほとんど相反しているのが実状といえよう。教育には価値的な目的意識があり、素材である人間に陶冶性すなわち形成され得る可変性、可塑性があることが前提になっている。この可塑性のモメントとして自然、社会、素質、教育があげられている。教育の仕方によっては常識では考えられない行動に走る者も現れることは世界の歴史でも、最近の日本の報道でも示されている。教育とは将に恐ろしいものという実感がある。自然を考えるには無理な環境破壊、社会を考えるには空恐ろしいマスコミ、素質を引き出すには無意味な教育

内容、精神発達を促すにはほど遠い教育方法等々教育の実状を批判することは容易である。しかし教育の一面としての恐ろしさを考えるとき、もう一度教育について実践の方法を考え直さねばならないと思う。種々雑多な複雑な要件が入り交じり、それぞれのことがそれぞれに関連して解きあかさねばならないカオス的状况となっている。とても一筋縄ではいかないことは明白ではあるが。

(財団理事、名古屋大学名誉教授、テルモ研究開発センター所長)